

ドゥンス・スコトゥス『アリストテレス「命題論」 第1巻問題集』第2問題 試訳

著者	小山田 圭一, 石田 隆太, 内山 真莉子, 本間 裕之
著者別名	OYAMADA Keiichi, ISHIDA Ryuta, UCHIYAMA Mariko, HONMA Hiroyuki
雑誌名	筑波哲学
巻	25
ページ	48-64
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.15068/00145667

ドゥンス・スコトゥス
『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』第2問題 試訳

小山田 圭一／石田 隆太／内山 真莉子／本間 裕之

はじめに

本稿は、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスによる『アリストテレス「命題論」第1巻問題集』第2問題の試訳である。本稿の訳出した第2問題では、名称〔nomen〕が事物〔res〕¹を表示するのか、それとも魂における形象〔species in anima〕を表示するのかどうか問われている。

第2問題の構成は以下の通りである²。最初に、問題となるアリストテレスの原文（「それゆえ、それらは」云々）が提示され、1では問題への導入がなされている。その上で、2から8においては【第一の道】として名称が形象を表示するという立場の論拠が列挙される。次に、9から19においては【第二の道】として名称が事物を表示するという立場の論拠が列挙される。【第二の道】の内、9から12は事物が表示されることを肯定的に述べる議論であるのに対して、13から19は形象が表示されることを否定する議論になっている。

当該の問題に対するスコトゥスの立場は20から24において最初に示される。すなわち、一言で言うなら、名称は事物も形象も表示するというのが当該の問題に対するスコトゥスの答え方である。20では始めに「可知的形象は音声によって直接的に表示される」と明言された上で、終わりの部分で「事物を表示するものである限りでの類似性を表示する音声は、事物そのものも——ただし間接的に——表示する」と述べられるに至る。

25以降では、2から19までの議論が様々な観点から再考されていく。25では【第二の道】の9から12までが是認された上で、26から38までは13から19までの議

¹ 以下では「もの」と「こと」の両方を表す訳語として「事物」という訳語を用いる（O）。

² ただし、本問題におけるスコトゥス自身の立場はそれほど明確ではないため、以下で祖述するような議論の展開はあくまで一例にすぎないことをここでは強調しておく。この問題におけるスコトゥス自身の立場も含めて、スコトゥスにおける表示の理論に関する先行研究としては Dominik Perler (“Duns Scotus’s Philosophy of Language”, in *The Cambridge Companion to Duns Scotus*, WILLIAMS, Th. ed., Cambridge: Cambridge University Press, 2003, pp.161-92) のものと Giorgio Pini (“Species, Concept, and Thing: Theories of Signification in the Second Half of the Thirteenth Century”, *Medieval Philosophy and Theology* 8 (1999), 21-52) のものを挙げておく（I）。

論に対する反論が試みられる。次に、39では9から12までの議論に対して、名称によって表示される事物がどのようなものであるかを説明している。それに対して、40から44までは2から8までに取り挙げられた権威に基づく議論に対する再考が促される。

最後に、45以降では当該の問題に対する様々な立場が総括されていく。45では、【第一の道】と【第二の道】の中でも蓋然的な方を選ぶべきことが明言される。46では【第一の道】に賛成の立場が示されるのに対して、47では【第二の道】に賛成の立場が示される。その上で、48と49では両方の道に(中でも【第一の道】に)反対の立場が示されるのに対して、50では【第二の道】に反対の立場が示される。このような入り組んだ叙述の果てにスコトゥスは「明らかなように、第一の道の方は権威によれば、第二の道の方は論拠によれば蓋然的である」と述べてこの問題を終えている。

なお、本稿は下訳をOが作成した上で訳者全員が検討を加えて作成したものである。また、【 】の部分は底本の編者によるものであることを断っておく(I)。

試訳

アリストテレス『命題論』第1巻問題集

第2問題

名称は事物を表示するのか、あるいは魂における形象を表示するのか。

「それゆえ、それらは」云々³。

1. 『命題論』[第1章16a3-4]でアリストテレスは、表示を行う音声に関する短い論考を前置きしている。それゆえ、名称は事物を表示するのか、あるいは魂における形象を表示するのかが問われうる。そして[こうした問いは]、類似性や形象を表示するために付与された名称について理解されるのでは全くないが、何であれ他の名称についてならいかなるものに付与されようとも理解される。例えば、「人間」や「動物」などの名称について、「人間」は人間の本性を表示するのか、あるいは形象を表示するのかが理解される。他方で、私が可知的形象あるいは類似性と言うのは、基体

³ アリストテレス『命題論』第1章16a3-4(AL II.1, p.5, ll.4-6)「それゆえ、音声においてあるものは魂においてある受動の、書かれるものは音声においてあるものの徴表である」(I)。

においてあるという仕方では知性においてあるものことであり、それはちょうど、可感的形象が可感的事物の類似性——それは基体においてあるという仕方では感覚においてある——であるのと同様である。

2. 【第一の道：名称は形象を表示する】『命題論』では原文において、名称は形象を表示すると「言われている」と思われる。その理由は以下の通りである。「音声においてあるものは、魂における受動の徴表である」〔*Ea quae sunt in voce sunt notae passionum in anima*〕、すなわち「受動」を表示するものであるとアリストテレスは言う⁴。そうした受動は事物ではない。なぜなら、事物は魂においてあるのではないからである。

3. また、そのすぐ後には「魂の受動——第一にその徴表であるのが表示を行う音声である——はすべての人にとって同じであり、事物——その類似性であるのが魂の受動である——もまた「すべての人にとって」同じである」〔*Passiones animae sunt omnibus eadem, quorum primorum hae voces sunt notae, et res etiam sunt eadem, quarum sunt hae passiones similitudines*〕⁵とある。この原文は「受動」によってアリストテレスが何を理解しているのかを明白に説明している。なぜなら、類似性のこと「[をアリストテレスが理解しているの]」だからである。そして、音声によって第一に表示されるのは事物の類似性であるとアリストテレスは言う。ところで、事物はそれ自身の類似性ではない。それゆえ、云々。

4. また、真理や虚偽は、表示するものとしての陳述〔*sermo*〕においてのみある。それゆえ、発話された言明は、真理や虚偽がそこにおいてあるものを表示する。それは知解の複合と分割であり、アリストテレスが原文ですぐ後に言う通りである⁶。それゆえ、複合された言明は、複合された知解においてのみあるものを表示する。それゆえ、言明の諸部分も、単純な知解においてあるもの——形象はそうしたものである——を表示する。

5. また、音声は類似性を表示するということを、ボエティウス⁷は『命題論』〔第

⁴ 註3を見よ (I)。

⁵ アリストテレス『命題論』第1章 16a5-8 (AL II.1, p.5, ll.6-9) 「そして字句がすべての人にとって同じではないように、音声も同じではない。ところで、魂の受動——第一にその徴表であるのが音声である——はすべての人にとって同じであり、事物——その類似性であるのが魂の受動である——もまた「すべての人にとって」同じである」(I)。

⁶ アリストテレス『命題論』第1章 16a13-4 (AL II.1, p.5, ll.14-5) 「というのも、虚偽と真理は複合と分割に関するものだからである」(I)。

⁷ ボエティウス『アリストテレス「命題論」註解』(第2版)第1巻第1章 (Meiser2, p.35, ll.15-

1章 16a3-4]への註解でしばしば明白に言い、この意見はアリストテレスのものであると言う。

6. また、プリスキアヌス⁸は「言表のすべての部分は精神の概念を表示する」[*omnis pars orationis significat mentis conceptum*]と言う。窺われるように、そうした概念は事物ではなくて類似性である。それゆえ、云々。

7. また、音声によって第一に表示されるものこそ、第一に知解されるものである。[しかるに、]そうしたものは事物ではない。それゆえ、云々。小前提[すなわち、第一に知解されるものが事物ではないということ]の証明:すべての可知的なものは知性においてある。[しかるに、]事物は知性においてあるのではない。なぜなら、アリストテレス『魂について』第3巻によれば⁹、「石ではなくて、石の類似性あるいは形象が魂においてある」[*lapis non est in anima, sed eius similitudo vel species*]からである。それゆえ、云々。最後の大前提[すなわち、すべての可知的なものが知性においてあるということ]の証明:その理由は次の通りである。『魂について』第3巻で保持されていることによれば¹⁰、「知性と可知的なものからは、質料と形相からよりも真に一なるものが生じる」[*ex intellectu et intelligibili fit verius unum quam ex materia et forma*]。しかるに、知性の外にあるものからは、質料と形相からよりも真に一なる

20)「魂の受動——それをアリストテレスは知解と呼んだ——は事物の或る類似性である。したがって、アリストテレスは、魂の受動について少し後で語る際には、隣接する順序で類似性へと[叙述の上での]移行を行った。なぜなら、彼が言っているのが受動であるか類似性であるのかは何も異ならないからである」(I)。

⁸ プリスキアヌス『文法学教程』第11巻第2章(Herz I, p.552, ll.1-2)「実際、言表の部分とは、精神の概念、すなわち思考、を示す音声以外の何であるか」(I)。

⁹ アリストテレス『魂について』第3巻第8章 431b29-432a1「というのも、石ではなくて形象が魂においてあるからである」(I)。

¹⁰ Cf. 『アリストテレスの諸権威』(Hamesse, p.194, ll.5-6)「可知的なものが自らによって知解するものである場合においては、知解するものと知解されるものがすべての仕方において同じであることになる」; アヴェロエス『アリストテレス「魂について」大註解』第3巻第5註解(Crawford, p.404, ll.501-8)「したがって、われわれは以下のように言おう。人間が現実態において知解するものであるのは、ただ、知解されたものと人間の現実態における連続性のゆえにのみであるということは明白である。そして、次のことも明白である。すなわち、質料と形相は、それらから集積されたものが一つのものであるというような仕方でも相互に繋がれており、そして質料的知性と現実態において知解された観念[*intentio intellecta*]は最大限にそうである。というのも、質料的知性と現実態において知解された観念から複合されるものは、それらとは別の或る第三のもの——質料と形相から複合される他のものについてそうであるような——ではないからである」; トマス・アクィナス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第3章(Leon. 45.1, p.216, ll.80-6)「したがって、現実態において知解された事物の形象は知性そのものの形象であり、かくして、その形象を通じて知性は自分自身を知解することができる」(I, O)。

ものが知性とともには生じはしない。それゆえ、云々。

8. また、形象を通じてでなければ何も知解されない。それゆえ、形象を通じてでなければ何も何らかの音声によって表示されない。それゆえ、形象の方がより一層〔音声によって〕表示される。なぜなら、「各々のものがしかじかであることが何かのゆえであれば、その何かはより一層しかじかである」〔*unumquodque propter quid, et illud magis*〕¹¹からである。

9. 以上に対立することに向けて：

【第二の道：名称は事物を表示する】より後にある「動詞について」という章の終わりでアリストテレス¹²は「〔動詞を〕言う者は知解を定めるがゆえに、動詞は何かを表示する」〔*Verbum significat aliquid; constituit enim intellectum qui dicit*〕と言う。このことから、「表示することは知解を定めることである」〔*significare est intellectum constituere*〕ということが解される。それゆえ、音声によってその知解が定められるものが表示される。しかるに、発話された音声によって定められるのは、形象ではなくて事物の知解であり、それは表示を行う音声を聴くいかなる者においても明らかな通りである。

10. また、『詭弁論駁論』の始めで¹³アリストテレスは「われわれは、討論するのに事物をわれわれの所に持ち込むことはできないのだから、名称を既知の事物の代わりに用いる」〔*nominibus utimur pro rebus notis, quia non possumus nobiscum ferre res ad disputandum*〕と言う。それゆえ、音声は魂の受動の徴表ではなくて事物の徴表である。

11. また、『詭弁論駁論』〔第1章 165a5-6〕の少し後¹⁴：「事物は無限である一方で、名称は有限である」〔*res sunt infinitae, nomina autem finita*〕がゆえに、一つの名称

¹¹ アリストテレス『分析論後書』第1巻第2章 72a29-30 (AL IV.1, p.9, ll.13-4)「というのも、各々のものがしかじかであることがそのゆえであれば、それは常により一層しかじかであるからである」(I)。

¹² アリストテレス『命題論』第3章 16b19-21 (AL II.1, p.7, ll.14-6)「実際、それ自体で言われた動詞そのものは名称であり何かを表示する。というのも、〔動詞を〕言う者は知解を定め、〔動詞を〕聴く者は〔知解の対象において〕静止するからである」。Cf. 『アリストテレスの諸権威』(Hamesse, p.305, ll.36)「表示することは知解を定めることである」(I)。

¹³ アリストテレス『ソフィスト的駁論』第1章 165a5-6 (AL VI.1, p.6, ll.3-5)「たしかに、事物そのものを討論することに持ち込むことはできないのだから、われわれは名称を既知の事物の代わりに用いる」(I)。

¹⁴ アリストテレス『ソフィスト的駁論』第1章 165a11-2 (AL VI.1, p.6, ll.7-8)「というのは、実際、名称は有限であり、言表の多数性も有限であるのに対して、事物は数という点で無限であるからである」(I, O)。

や一つの言表が複数の事物を表示することは必然である。

12. また、『形而上学』第4巻で¹⁵アリストテレスは「名称が表示する理拠は定義である」〔*ratio quam significat nomen est definitio*〕と言う。しかるに、定義は事物の真の本質を示す。それゆえ、そうした本質は名称によって表示される。

13. 【名称は形象を表示しない】他方で、形象は表示されないとされる。

14. その理由の一つには以下の通りである。形象が表示されるとしたら、すべての名称は附帯性を表示することになってしまう。なぜなら、そうした形象は、可視的形象が目においてあるのと同様に、基体においてあるという仕方で魂においてあるからである。

15. また一つには以下の通りでもある。主語と述語が相異なる形象を通じて認識される肯定命題——例えば「人間は動物である」〔*homo est animal*〕のような命題。というのも、命題がそれを通じて知解される人間および動物の形象は別々だからである——はすべて偽であることになってしまう。また全般的に、何らかの主語について実在する働きが言明されるような命題——「人間が走っている」〔*homo currit*〕などのようなもの——がすべて偽であることになってしまう。

16. また一つには以下の通りでもある。『魂について』第3巻におけるアリストテレス¹⁶の次のような命題、すなわち「石が魂においてあるのではなくて、石の形象が魂においてある」〔*lapis non est in anima, sed species lapidis*〕は矛盾を含むことになってしまう。なぜなら、命題の第一の部分「石が魂においてあるのではなく」によれば「石」という名称によって表示される石の形象からはまず「魂においてあること」〔*esse in anima*〕が取り去られるが、[命題の]第二の部分[「石の形象が魂においてある」]によれば同じ述語[すなわち「魂においてあること」]が同じ主語[すなわち「石」という名称によって表示される石の形象]に帰属することになってしまうからである。

17. また一つには以下の通りでもある。「ソクラテスが存在する」〔*Socrates est*〕や「反キリストが存在する」〔*Antichristus est*〕のように、「が存在する」〔*est*〕という動詞が二番目の隣接語として述語付けられる命題はすべて真であることになって

¹⁵ アリストテレス『形而上学』第4巻第7章 1012a24-5 (AL XXV.3.2, p.90, ll.629-30)「というのも、名称がそれを表示するものであるような理拠は定義になるからである」(I)。

¹⁶ 註9を見よ (I)。

しまう。なぜなら、それについてわれわれが「存在」〔esse〕を言明するような、いかなる主語の形象も存在するからである。

18. また一つには以下の通りでもある。いかなる三段論法も完全ではないことになってしまう。なぜなら、もし中項によって魂における形象が表示されるとするなら、三段論法が事物の方に解されるにせよ形象の方に解されるにせよ、それは中項の代示対象の方に解されるのではないことになるからである。

19. また一つには以下の通りでもある。知解されるものでなければ何も表示されない。〔しかるに、〕可知的形象は知解されない。第一にそのことは類似のことによって示される。なぜなら、可視的形象は見られないからである。第二の理由は次の通りである。可知的形象とはそれによって可知的なものが知解されるようなもの〔illud quo intelligibile intelligitur〕である。しかるに、ボエティウスによれば¹⁷、第一のものを除くすべてのものにおいて、「あるもの」〔quod est〕と「それによってあるもの」〔quo est〕は違う。第三の理由は次の通りである。もし可知的形象が知解されるなら、別の形象を通じて知解されることになってしまう。〔したがって、それが無限に続いてしまう。〕というのも、知性は、受動的な力であるのだから、自らの対象の形象によって現実態においてあるのでなければ何も知解しないからである。

【I. 問題に対して】

20. 問題に対しては以下のように言われる¹⁸。可知的形象は音声によって直接的に

¹⁷ ボエティウス『デ・ヘブドマディプス』第2章 (Peiper, p.169, ll.26-8) 「あること〔esse〕とあるもの〔id quod est〕は相異なる。あることそのものはまだあらぬが、それに対してあるものは、あることの形相として受け取られると、あるし存立する」(I)。

¹⁸ ボエティウス『アリストテレス「命題論」註解』(第1版)第1巻第1章 (Meiser I, p.40, ll.16-22) 「例えば、私が「石」と言う場合、「石」は石の知解と石そのもの、すなわち実体そのものを指示する。しかるに、「石」はまずは知解を、しかし二番目には事物を表示する。それゆえ、音声が表示するすべてのものが魂の受動であるわけではなくて、〔音声が表示する〕第一のものだけがそうである。というのも、音声はまずは知解を、しかし二番目には事物を表示するからである」; アンモニオス『アリストテレス「命題論」註解』第1章 (Verbeke, p.45, ll.51-6) 「実際アリストテレスは「しかしながら、これは第一にそれを表示するものである」と言っているが、その際に彼は「これ」ということで音声においてあるもの、すなわち名詞と動詞——これが第一にそれを表示するものである——のことを言っている (他方で、アリストテレスは〔「それ」ということで〕概念〔conceptio〕のことを言っている。ところで、概念を通じて事物も表示されるが、ただし直接的にはではなくて、中間の概念を通じてである。しかしながら、概念はやはり他の媒介を通じてではなくて、第一に直接的に表示される)»; アルベルトゥス・マグヌス『アリストテレス「命題論」註解』第1巻第2論考 (Borgnet I, p.381a) 「ところで、徴表が、事物の

表示される。しかるに、可知的形象は二通りに考察される。一つには、それ自体における何かである限りにおいて、すなわち附帯性が魂を形相付ける限りにおいてであり、一つには、事物を表象する限りにおいてである。対立することに向けた諸論拠のゆえに、第一の仕方ではなくて第二の仕方でも可知的形象は表示される。ところで、表示するものである限りでの表示するものを表示するものはすべて、[前者の表示するものによって]表示されるものを表示するものであるから、事物を表示するものである限りでの類似性を表示する音声は、事物そのものも——ただし間接的に——表示するということが帰結する。なぜなら、すなわち、そうした音声が直接的に表示するのは、表示するものである限りで事物を表示するものだからである。

21. 以上とは反対に：実体と附帯性にはいかなる実体的な理拠も同じものとして当てはまらない。というのも、実体と附帯性は同じ最も一般的な類を有さないからである。しかるに、実体である事物との類似性は附帯性である。それゆえ、もし何らかの名称によって実体と附帯性が表示されるとするなら、それら二つのものにとっては「名称のみが共通で、実体の理拠は相異なる」[*solum nomen commune et ratio substantiae diversa*] ことになる¹⁹。したがって、すべての名称は同名異義的であることになる。

22. そして [21 の] 論拠は、『範疇論』の始めにおけるアリストテレス²⁰によって補強される。そこで彼は、同名異義語について「人間も描かれるものも動物」[*animal homo et quod pingitur*] のような事例を挙げ、その際に彼は、このことを通じて、もし何らかの名称が事物と事物の類似性を表示したとするなら、その名称は同名異義的であることになってしまうということを理解している。

23. 21 に対して、以下のことが言われる。同名異義語は、表示の相異なる働きによって多くのものを表示する。しかるに、音声は、同じ働きによって事物と類似性を表示するものである。なぜなら、同じ働きによって音声は、それによって表示されるも

観念から魂において原因される受動に属するということを通じては、その徴表は第一に事物の徴表であるのではなくて、むしろ第一には魂においてある類似性の徴表であり、その類似性を通じてその徴表は事物に対して関係付けられるということが認められる」；トマス・アクィナス『アリストテレス「命題論」註解』第1巻第2講 (Leon. 1.1, p.11, ll.109-12) 「それゆえ、音声は、概念と事物の媒介となりながらも、知性の概念を直接的に表示するというを言うことがアリストテレスにとっては必然的であった」(I)。

¹⁹ 註20を見よ (I)。

²⁰ アリストテレス『範疇論』第1章 1a1-2 (AL I.2, p.47, ll.2-3) 「その名称のみが共通であるのに対して、名称に即しては実体の理拠が相異なるものであるもの——例えば、人間も描かれるものも動物である——は同名異義的であると言われる」(I)。

のを表示するものでもある限りで、表示するものを表示するものだからである。

24. [22 での] 補強に対して 23 によれば：アリストテレスは、がそのように理解するのは、表示の相異なる働きと相異なる付与〔*impositio*〕によって〔事物とそれの類似性〕両者を表示したとするという仮定の下でのことである。このことは類似のことにおいて明らかである：書き言葉〔*dictio scripta*〕がすべて同名異義的であるわけではなくて、アリストテレス²¹が言うように、書き言葉は話し言葉〔*dictio in voce*〕を表示し、その際に事物も表示する。ところで、今の場合に同名異義性はない。なぜなら、話し言葉が表示されるのは、それが表示されるものを表示するものである限りにおいてだからである。

【II. 対立することへの議論に対して】

25. 名称は象形を表示するという立場に反対する主要な論拠〔すなわち 9 から 19 までの論拠〕に対して：事物が表示されることを証明する論拠〔すなわち 9 から 12〕はすべて是認される。

【A. 名称は象形を表示しないことを証明する論拠に対して】

26. さて、象形が表示されないことを証明する論拠に対しては：

第一の論拠〔である 14〕に対しては以下のことが解答される。すべての名称が、それ自体における何かである限りにおいてではなくて事物を表示するものである限りにおいては、直接的に附帯性を表示することは不整合ではない。そのようにして何らかの音声は最後に表示されるものとしての実体を表示するのであるからして、それは絶対に実体を表示すると言われる。その理由は次の通りである。書き言葉について明らかなように、何らかのものは直接的にでなくても端的には表示することができる。その書き言葉の内の何らかのものは、端的には実体を表示と言われる。もっとも、アリストテレスの原文²²によれば、そのすべてが直接的には音声を表示するのではあるが。

27. 第二の証明〔である 15〕に対して：以下のことが理解されるべきである。表示

²¹ 註 3 を見よ (I)。

²² 註 3 を見よ (I)。

されるものによるのでなければ真理と虚偽は表示するものにおいてない。その理由は次の通りである。真理とは表示するものと表示されるものとが同形相であること〔conformitas〕であり、虚偽は異形相であること〔difformitas〕である。ところで、形象が事物を表示するものである限りで、形象相互の複合が真や偽であるのは、表示するものである限りでの形象について語るなら、表示されるもの、すなわち事物によってのみである。したがって、いかなる命題であれ、その真理は事物に対して関係付けられるべきである。なぜなら、事物は最後に表示されるものであって表示するものではないからである。このことは例において明らかである。「人間は動物である」という書かれた命題は、「人間」という音声は「動物」という音声ではなくても、偽であるとは言われない。そしてその理由は、字句は、それ自体において何かである限りにおける音声ではなく、他のものを表示するものである限りにおける音声を表示するからである。そのようにして、こうした命題すべてにおいて、最後に表示されるものへと常に再帰しなければならない。

28. 27によって、命題の真理と虚偽に関するすべての証明〔すなわち15から17〕に対しては明らかである。なぜなら、真理は、最後に表示されるもの——それは事物である——に則ってのみ判断されるべきだからである。

29. ここで「人間は動物である」ということに対して反論がなされるとしよう。その場合、第一に表示される諸々のものは同じであることが知られる。なぜなら、音声は言表において、自らによって第一に表示されるものを措定するからである。したがって、この場合にそれらの形象は同じであることが知られるが、それらは〔実際には〕同じではない。したがって、命題は第一に表示されるものに関しては偽である：

30. それらの形象は事物を表示するものである限りにおいて合一され、かつそれらは同じではないということは是認されるとしても、命題が偽であることは帰結しない。その理由は次の通りである。真理も虚偽も、表示するものである限りでの表示するものに関わるものであることを本性とするのは、表示されるものに帰することによってのみである。しかるに、もし何らかの真理ないし虚偽が命題について言われるべきであるなら、複合はそれにもまして真であると言われるべきである。なぜなら、表示されるものの複合が真だからである。

31. 反対に：事物の類似性である限りでの一方の形象は、事物の類似性である限りでの他方の形象ではないが、しかしながら、あなたによれば、「である」〔est〕とい

う動詞を通じてそれらは同じであることが知られる。したがって、すべての肯定を通じては、同じではないものが同じであるということが第一に知られ、そしてすべての命題は、そうした複合に関する限りで真ないし偽と言われる。というのも、命題は端的に複合だからである。そしてそうした命題は真ではない。なぜなら、その命題が表示する通りにはならないからである。したがって、すべての命題は偽である。

32. この論拠 [すなわち 31] は解決するのが困難だと思われるが²³、しかしながら、[この議論が]必然的であると結論付けることはない。というのも、議論の形式 [forma arguendi] が同じである他の場合には [解決することが] 困難ではないからである。実際、「人間は動物である」という書かれた言表においては、音声²⁴が第一に表示されるがゆえに、音声²⁵が第一に合一されるが、しかし、だからといってこの書かれた言表が偽であるわけではない。

33. それゆえ、31 に対しては以下のことが言われるべきだと思われる。同じ名称によってどれだけ多くのものが表示されようとも、それらの内の一つは他のものを表示するものである限りにおいて表示されるのであり、もしそれが言表において他のものと複合されるとするなら、表示するものとはなくて最後に表示されるもの——それは表示するものではない——との複合があることになる。そして発話された言明によっては、諸形象ではなくて諸事物の複合が表示される。それはちょうど、書かれた言表を通じては、諸音声ではなくて諸事物の複合が表示されるのと同様である。

34. 三段論法に関する証明 [である 18] に対しては以下のことが言われうる。受け取られるべき代示対象は、完全な三段論法において、中項によって最後に表示されるものに関わる限りで中項の下にあり、その場合、理性によって考察される限りでの事物は事物 [という名称] の代示対象である。

²³ Cf. アダム・デ・ヴォデハム『命題集第1巻第2講義』第1巻第22区分第1問題第5節 (Wodeham III, p.285, ll.46-55) 「以上のことに対してスコトゥスは、『「命題論」問題集』で「この論拠は解決するのが困難だと思われるが、しかしながら」、字句 [scriptura] と音声について「必然的であると結論付けることはない」ということを通じてうまく解答している。そしてスコトゥスによれば、それらは問題提起されたことにおいても同じ仕方によってあるのではない。その理由は、スコトゥスによれば次の通りである。「同じ名称によってどれだけ多くのものが——秩序付けられて [ordinate]、ということ²⁶を補足せよ——「表示されようとも」、スコトゥスによれば、「…或る一つのもは他のものを表示するものであり、もしそれが言表において他のものと複合されるとするなら、表示するものの複合ないし同一性がある」、すなわち知られる「のではなくて、最後に表示されるもの——それは表示するものではない——の複合ないし同一性がある」。そしてスコトゥスが言うように、「発話された言明によっては、形象ではなくて事物の複合が表示される。それはちょうど、書かれた言表によっては、音声ではなくて事物の複合が表示されるのと同様である」(I)。

35. 最後の証明〔である19〕に対しては以下のことが言われる。形象は知解されるが、第一にではなくて反省〔reflexio〕を通じてである。そして付与は約定されたもの〔placitum〕に対してあるのだから、音声は、知解の媒介によって約定されたものを表示するために反省を通じて付与されるのであり、それは約定されたものを第一に知解されるものとして表示する場合でも同様である。

36. 可知的形象は知解されないことを証明する証明に対して。

第一の証明〔である19の内の第一の理由〕に対しては、類似性が否定される。その理由は以下の通りである。感覚は、質料的な力であるがゆえに、自らの活動へも自らが認識するものへも自らを反省させることはできず、それゆえ、可感的形象は感覚されない。しかるに、知性は、自らの非質料性のゆえに、自らの活動と自分自身とそれによって対象が認識される形象とへ²⁴自らを反省させることができるのであり、自らの第一の対象とは別のすべてのものに対して、反省を通じて知解し認識することができる。

37. もう一つの証明〔である19の内の第二の理由〕に対しては、形象が、形象を通じて認識されるもの、すなわち第一の対象とは別のものであることを私は是認する。なぜなら、形象は第一の対象に関するものだからである。しかるに、このことと、形象そのものが第一の対象とは別の何らかの可知的なものであることは両立する。

38. 第三の証明〔である19の内の第三の理由〕に対して、私は以下のように言う。形象は別の形象を通じて認識されるのではない。なぜなら、知性によって第一に認識されるもの、すなわち知性の第一の対象——それは質料的事物の何であるか〔すなわち本質〕である——だけが知性において形象を作る。反省や推論〔discursus〕を通じて認識される他のすべては固有の形象なしに²⁵認識される。

【B. 名称は事物を表示することを証明する論拠に対して】

²⁴ 底本に従うなら「自らの活動と自らが認識する形象と自分自身へも」となる。ここでは、反省なしに知性が形象を認識するという意味になることを避けるために O 写本の読みを採用した (O)。

なお、L 写本の読みを採用すると「自らの活動とそれによって〔対象が〕認識される形象と自分自身へも」となる。こちらの読みに従っても、反省なしに知性が形象を認識するという意味になることを回避できる (I)。

²⁵ 底本に従うなら「固有の形象によって」となる。ここでは、反省や推論による認識では固有の形象はそもそも必要とされないはずであるという理解に基づいて、L 写本および R 写本の読みを採用した (O)。

39. 問題の対立する側 [すなわち 9 から 12] に対しては以下のことが言われる。事物は第一に表示されるが、しかしそれは、存在するかぎりにおいてではなくて——事物が知解されるのもそのかぎりにおいてではない——、知性によって自体的に捉えられるかぎりにおいてであり、これはすなわち、先に引用された [アリストテレス] 『形而上学』第4巻という権威が主張するように²⁶、本質そのものであり、それは定義を通じて表示される、知性の第一の対象である。しかしながら、「知解される限りでの事物」[*res ut intelligitur*] ということによって複合されたもの全体が表示されるわけではない。その理由は次の通りである。複合されたものは附帯的な有である。[それに対して、] 何らかの類に属する事物を表示するすべての名称は自体的な有を表示する。というのも、自体的な有だけが類においてあるからである。

【III. 主要な議論に対して】

40. 反対の側にいるすべての権威 [すなわち 2 から 8] に対しては以下のことが言われる。形象、受動、概念を通じてであれ、あるいは他の権威における他のいかなるものを通じてであれ、「知解される限りでの事物」が表示されるのは、「存在する限りでの事物」[*res ut existit*] が表示されるのではないことを指し示すためである。ところで、もし、アリストテレスの『命題論』の原文の代わりに誰かがより明白なことを言うとするなら、その点においてその者はアリストテレスを説明していないということが言われるであろう。

41. 複合と分割に関する 4 に対して²⁷、私は以下のように言う。複合は形象そのも

²⁶ 本問題第 12 段落を見よ (O)。

²⁷ Cf. アダム・デ・ヴォデハム『命題集第 1 巻第 2 講義』第 1 巻第 1 区分第 1 問題第 4 節 (Wodeham I, pp.187-8, ll.48-61) 「また、以上と同じこと、すなわち外にある事物が、外にあるものとしてではないが、命題の外にあるということをスコトゥスは『アリストテレス「命題論」第 1 巻問題集』第 2 問題で保持しており、その際に彼はそこで平明な仕方次第のことを言う。複合は形象ないし類似性そのものではなくて事物についてのものであるが、しかしながら、それは、存在する限りにおいてではなくて知解される限りにおいて——知解が音声によって表示されることでもあるという仕方次第——の事物についてである [cf. 第 2 問題 41]。しかしながら、「知解される限りでの事物」ということで複合されたもの全体が表示されるわけではない。その理由は次の通りである。複合されたものは附帯的な有であるのみである [cf. 第 2 問題 39]。それゆえ、スコトゥスはそこで結果として次のことを言う。「それゆえ、知性の複合や分割に関して真理や虚偽があるとされる。なぜなら、そうした複合は、知性によって」——複合の本性に関しては実在的に [*realiter*] だが外にあるものに関しては観念的に [*intentionaliter*]、とい

のではなくて事物に関するものであるが、しかしながら、それは、存在する限りではなくて知解される限りでの事物についてである。それゆえ、知解の複合や分割に関して真理や虚偽があると言われる。なぜなら、そうした複合は、知性によって原因され、それが知性においてあるのは、認識されるものが認識するものにおいてあるという仕方であって附帯性が基体においてあるという仕方ではないからである。そのようなわけで、私は複合の部分について次のことを是認する。すなわち、その部分は認識されるものが認識するものにおいてあるという仕方であって単純な知解においてあり、そうした仕方では、事物が知性においてあるのであって、形象だけがあるのではない。

42. 7に対して、私は以下のように言う。第一に知解されるのは事物であって、反省を通じてでなければ形象ではない。知性と可知的なものなどに関する別のもの〔すなわち7の小前提の証明の内の大前提の証明〕に対しては、それがどのように理解されるべきであるかが『ポルピュリオス「イサゴージェ」問題集』で言われている²⁸。

43. 8に対しては、「形象を通じてでなければ何も知解されず、したがって、形象を通じてでなければ何も表示されない」〔*nihil intelligitur nisi per speciem, igitur nihil significatur nisi per speciem*〕という帰結は、もし実際に「を通じて」〔*per*〕ということがどちらの場合にも原因的な意味で解されるとするなら、否定される。その理由は以下の通りである。表示することと知解することは、必然的原因と結果のように相互に秩序付けられてはおらず、表示することが知解することを自らがそれなしにはないもの〔*illud sine quo non*〕として前提している。ところで、そのようにして前提され

うことを補足せよ——「原因され、それが知性においてあるのは、認識されるものが認識するものにおいてあるという仕方であって附帯性が基体においてあるという仕方ではないからである」。次の註釈は最初の註釈とまさに反対である。「そのようなわけで、私は複合の部分について次のことを是認する。すなわち、その部分は認識されるものが認識するものにおいてあるという仕方であって単純な知解においてある。そうした仕方では、事物が知性においてあるのであって形象だけではない」〔cf. 第2問題41〕。したがって、スコトゥスによれば複合的なもの〔*complexum*〕および或る程度複合的なもの〔*quale complexum*〕が同意〔*assensus*〕の対象であることは明らかである」(I)。

²⁸ ドゥンス・スコトゥス『ポルピュリオス「イサゴージェ」問題集』第9-11問題第20段落(OPh I, p.47, l.18 - p.49, l.7) 「「知性と可知的なものからは、質料と形相からよりも真に一なるものが生じる」という註釈家〔アヴェロエス〕の言うことは、知性と可知的なものから一つの複合されたものが生じるということだとは理解されえない。なぜなら、そのように理解すると、知性は可感的なものすべての何性から複合されていることになってしまうからである。しかし、次のことは理解されるべきである。現実態における知性は、質料が形相と一つであるのよりも真なる仕方、現実態における可知的なものとともに「一つである」という述語付けを受容する。その理由は次の通りである。現実態における可知的なもの形象を通じて知性は反省することで自分自身を知解できるがゆえに、現実態における知性は現実態における可知的なものである。他方で、形相と複合されるということを通じて質料が形相であるのではない」(I, O)。

たものの原因であるものは、前提するものの原因である必要はなく、前提されたものの原因であるものがその原因であるもの〔すなわち前提されたもの〕と同様に、前提するものに対して前提されるだけであり、そのような仕方では表示に対して前提される。

44. 他方で、「形象を通じてでなければ何も表示されない」という命題が是認されるとしても（「を通じて」が原因的な意味〔causaliter〕と前提的な意味〔praesuppositiv〕のいずれで解されようと）、形象が表示されるということがさらに帰結することはない。なぜなら、「各々のものがしかじかであることが何かのゆえであれば」云々という〔8で引用された〕命題は、作成的〔efficiens〕、一義的〔univocus〕、自体的〔per se〕、全体的な〔totalis〕原因について理解されるのであり、表示という観点では形象はそうしたものではないからである。

【IV. 問題の再検討】

45. 第一の道〔すなわち2から8〕と第二の道〔すなわち9から19〕の内、より蓋然的〔probabilior〕だと思われる方の道が選ばれるべきである。

46. 【第一の道に賛成する】さて、第一の道に賛成し、第二の道に反対するのは、特に、『命題論』原文における権威〔であるアリストテレス〕²⁹と、命題の真理や虚偽に関する議論〔すなわち4〕である。

47. 【第二の道に賛成する】第二の道に賛成し、第一の道に反対するのは、特に以下のような論拠である。事物は、形象が反省を通じて知解されるよりも、時間および本性という点で先に知解されるのだから、したがって、より先なるものにおいて知性は、ただ事物を表示するだけであるような名称をその先なるものに付与することができる。したがって、すべての名称が形象を表示することが必然的ではない。

48. 【両方の道に反対する】他方で、両方に反対し、しかしながら第一の道には一層反対するのは、個別的な〔singularis〕ものを表示するために付与される名称の力である。その理由は以下の通りである。個別的なものを表示することは第二の道によれば救われうる——すなわちなぜなら、個別的なものが第一にではなくても何らかの仕

²⁹ 本問題第1段落を見よ (I)。

方で知解されるから——が、しかしながら、このことは第一の道によれば救われえないことになってしまう。なぜなら、個別的なものはいかなる仕方によっても知性において形象を作らないからである。したがって、個別的なものに付与される名称は可知的形象を直接的に表示しない。

49. 空想されたもの〔*figmentum*〕を表示するために付与される名称に関する議論も同様な仕方でも成立する。その理由は以下の通りである。個別的なものも空想されたものも、想像力において形象を作るが、しかしながら、知性においてはそう〔形象を作る〕ではない。なぜなら、知性は、自らの第一の対象——それは質料的事物の何であるか〔すなわち本質〕である——の形象を受け取ることが本性である一方で、一つの能力は同じ類に属する形相のみを受容するものであるのだから、〔第一の対象以外の〕別のものの〔形象を受け取ることが本性とするの〕ではないからである。

50. 【第二の道に反対する】第二の道に反対するのは以下のことである。すべての命題は、何らかの現実的な現実態〔*actus realis*〕が主語に内在することが指し示される場合、偽である。その理由は以下の通りである。もし名称が知解される限りでの事物を表示するとするならば、何らかの現実的な現実態が指し示されるような述語が知解される限りでの事物に帰属することになってしまう。ところで、その場合、その述語は知解される限りでの事物に内在しない。したがって、云々。その場合にその述語が事物に内在しないということを私は次のように証明する。知解される限りでの事物には観念的な述語〔*praedicatum intentionale*〕が内在し、現実的な述語〔*praedicatum reale*〕と観念的な述語とに对照される中項は外にある理拠の下で解され、かくして三段論法における中項を解することによって、もし何らかの結論が結論付けられるとするならば、附帯性の誤謬³⁰が生じることになる。

51. 明らかのように、第一の道の方は権威〔*auctoritas*〕によれば、第二の道の方は

³⁰ 附帯性の誤謬だとされている具体例を四つほど挙げておく。Cf. ペトルス・ヒスパヌス『論理学綱要』第7論考第102段落 (*Hispanus*, p.356)「人間は種である。ソクラテスは人間である。それゆえ、ソクラテスは種である」；偽トマス・アクィナス『誤謬について』第11章 (*Leon. 43*, p.412, ll.44-6)「動物は四本足である。しかるに、人間は動物である。それゆえ、人間は四本足である」；同 (p.413, ll.124-6)「人間は笑いうるものである。しかるに、笑いうるということは固有のものである。それゆえ、人間は固有のものである」；トマス・アクィナス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第1章 (*Leon. 45*, p.206, ll.332-5)「表象像は或る仕方でも知覚的形象と一つのものである。ところで、知覚的形象は可能知性と一つのものである。それゆえ、可能知性は表象像と合一される」。なお、アリストテレスによる附帯性の誤謬の説明は『ソフィスト的駁論』第5章を参照せよ (O)。

論拠〔ratio〕によれば蓋然的である。

(おやまだ・けいいち 東京工業大学非常勤講師)

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学/
日本学術振興会特別研究員)

(うちやま・まりこ 慶應義塾大学大学院文学研究科在学)

(ほんま・ひろゆき 東京大学大学院人文社会系研究科在学)

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 (石田) の助成を受けたものである。